
灰原 短編集

コナン1412

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰原 短編集

【Nコード】

N3529Y

【作者名】

コナン1412

【あらすじ】

哀ちゃんや志保ちゃんの短編集です。

コ哀とか、K哀とか…。

真夜中のお客様（前書き）

初めてで見苦しいと思いますが、最後まで読んでもらえたら感謝です。

K哀です。

真夜中のお客様

「……………はあ……………」

哀は溜息をついた。

流石に3時間ずっとパソコンを見ていたら目が疲れる。

現在、夜の2時。

つい最近、自室を地下から二階の部屋に移した。

そのおかげで、自分の部屋からいつでも空が見える様になった。

窓には暗闇が四角く切りとられ、その中でダイヤモンドのように星が輝いている。

更に、今日は満月だ。

（なんて幻想的な夜なこと。）

さも興味無さげに少し見てから珈琲を淹れるためにリビングに下りた。

*

珈琲の入った真っ白できれいなマグカップを持って部屋のドアを開けると

「あら、こんばんは。」

「こんばんは、お嬢さん。」

窓が開いていて、白い怪盗がマントを靡かせてベランダの手摺りに

立っていた。

「珍しいお客様ね。」

哀はマグカップをキーボードの隣に置いた。

怪盗は笑っている。

「何をしに来たのかしら。なんなら中森警部を呼んであげてもいいのよ。」

真顔で携帯電話を開く。

「いえいえ、遠慮しておきましょう。」

怪盗は手摺りから下りて言った。

「今日は、貴方に会いに来たのですよ。」

『ボンッ』と音がして、いつの間にか怪盗の手には赤い薔薇の花束が。

そして哀に差し出した。

「あら、綺麗な花束なこと。」

そう言うと、花束を受け取った。

「お茶でも一緒にいかが？」

「では、お言葉に甘えて。」

別に興味が無い訳ではないし、少し話してみたかった。

「じゃあ私、珈琲淹れてくるから。余計な事はしないで頂戴。それと、ちゃんと土足は脱いでから入って。あと、窓も勝手に開けたんだから、きちんと閉めておいて。」

（ちょっと注文が多かったかしら。）

怪盗の分の珈琲を持って来ると、怪盗はベットに座って窓の外の方を見ていた。

「何を見ているのかしら？」

すると、怪盗はこちらを見て言った。

「空、ですよ。」

四角い暗闇を飛行機の光が横断していく。

しばらくの沈黙の後。

「では、そろそろ。」

あれからどれだけ時間が経ったのだろうか。

「あなたは気付かなかっでしょうが、あなたか私に珈琲を持って来
てから、もう20分が経っていますよ。あなたはその間、ずっと空
を見てましたかね。」

怪盗がクスクスと笑う。

いつの間にか怪盗と哀のマグカップは空になっていた。

怪盗は立ち上がって窓を開けた。

冷たい風が部屋の中に入って来た。

「では、また会いに着ます。小さな姫。」

そう言うと、哀の手の甲に口づけをした。

そして、白い翼を広げベランダから飛び去った。

哀はしばらく呆然と立ち尽くしていたが、ハッと我に振り返り手を洗いに行った。

告白（前書き）

コナン君と哀ちゃんが小6ん時の話です。

告白

私と工藤君が小学6年生の頃。

私は放課後、誰も居ない理科室に工藤君に呼び出された。

私のクラスの帰りのHRが終わるのが遅かったので、私は約束の時間に10分程遅れてしまった。

当然の如く、私が理科室に着いた頃にはもう彼は待っていた。立っているのに疲れたのか、椅子に座っていた。

しかし、工藤君は私を見ると私と向き合うように目の前に立った。

「待たせたわね。帰りのHRが長引いちゃったのよ。」

「ああ。別に大丈夫だ。」

「それより、話って何かしら？わざわざこんな所に呼び出して。もしかして……組織の事？何かわかったの？」

「いや、組織の事じゃない。」

「じゃあ何よ。」

「……いいか、灰原。今から俺が言うことは冗談じゃない。本気だ。落ち着いて聞いてくれ。」

「はあ？なんで私が組織以外の貴方の話に驚かなくちゃいけないのよ。」

「分かったから、聞いてくれ。」

「……何よ。」

彼の後ろの窓からは、オレンジ色の晴れた空が見える。

しばらくの沈黙の後、彼はこう言った。

「俺、おまえのことが……好きだ。」

「……は？」

余りにも状況が理解出来なくて、私は『は？』なんて間抜けな声を

出してしまった。

その間抜けな声が教室に響き渡る。

そして、彼はケロッツとして言う。

「な？落ち着いて聞けっていったろ？」

「なっ……あなた、どういっつもり？」

無性に腹が立つてきた。

「だから、言っただよ。おめえが好きだつて。」

「……………え？」

「だあ……っ、何度言わせんだよ！いいか？よく聞け！俺は、灰原が、好きなんだよ？」

ヤケクソになって叫んだ彼の顔は真っ赤だった。

「何を言っているの。貴方の好きな人は蘭さんでしょ？悪いけど、言う相手、間違ってるわよ。」

「……………それは、俺とは付き合えないって言っているのか？」

「まあ、そうなるわね。」

「っ、俺が嫌いなのか？それとも、蘭に悪いからか？」

「……………それは……………」

「これ、自分で言うのもなんだけど、見え見えなんだよ。おめえの態度で。灰原が俺のこと好きだつての。」

哀の顔が急に強張る。

「き、気のせいよ。」

「灰原。俺、こんなに勇気を振り絞って素直になつてるつてのに、おめえは俺の気持ち受け入れてくれないのかよ？」

「そうね。」

あんまり感情的にならないように、素っ気なく返しておく。しかし、それは逆効果だったようだ。

ついにコナンは怒りに満ちた表情で、それもポーフェイスで隠している様な真顔で、哀を向こうの机に押し倒した。

「痛っ。」

ガツと、哀の両手首をコナンが掴む。

そして、哀は抵抗する間もなくコナンに唇を奪われた。

「? —んっ……。」

ゆっくりとコナンの舌が哀の口に入っていく。

どれくらい長く唇を重ねていただろうか。

それを離れた頃には二人とも息が荒くなっていた。

「殺すつもり？」

「殺したい位欲しい。」

「じゃあ殺せば？」

まだ息が荒い彼はケラケラ笑っている。

「まあ、灰原は俺を受け入れたから、返事はオッケーだよな。」

「負けたわ。ところで、蘭さんにはどう話すの？」

「話すぜ、ちゃんと。好きな人ができたって。」

「……それでいいのかしら。」

「いいんじゃないの？」

「……そう。随分とテキトーなのね。」

「嬉しいんだよ。俺の隣が灰原になったのが。」

「良かったわね。」

「なんか、他人事だなあ。」

「そうね。きつと私も嬉しいんじゃない？」

「……素直じゃねー奴。」

「あら、ありがとう。」

「褒めてねーし。」

すると、哀はクルツと向こうを向いて教室のドアの方へ歩いていく。

「おっ、オイ。どこ行くんだよ。」

「教室にランドセル取りに行くのよ。もうそろそろ帰らないと、博

士が心配するわ。夕飯も作らなくちゃいけないし。」

コナンが時計を見ると、もう5時になっていた。小学生はとっくに授業は終わっている時間だ。

「待てよ。俺も一緒に行く。」

哀は少し振り返ると足を止めた。

そしてコナンが隣に來ると、歩調を合わせて歩いて行く。

「なあ、今日は俺も博士ん家で夕飯食べてもいいか？」
「いいわよ。」

そう言うと、コナンはさりげなく哀の手を握った。

告白（後書き）

学校で思いついて、急いで書きました（笑）
次話も宜しくお願いします？

素敵な*****（前書き）

コナン君と哀ちゃんは小3という設定でお願いします。

新志です。

素敵な*****

「蘭姉ちゃん。僕、クリスマスは阿笠博士と過ごすよ。だから、1月24日から25日まで博士ん家に泊まるね！」

クリスマスまであと一週間。

そんな日の夕食時に、いきなりコナン君がこんな事を言い出した。正直驚いた。

今年のクリスマスはお父さんとお母さんと、私とコナン君の四人で過ごすのだ。

私はてつきりそう思い込んでいた。

『クリスマスにはお母さん来てくれるって！家族三人揃うなんて、久しぶりだね！』

ああ、私が昨日あんな事を言ったから…。

「なんで？コナン君も一緒に居ようよ。」

一応、理由を尋ねてみた。

本当は分かっていた。

彼は、毛利家三人が揃う滅多にない機会に気を使っているのだ。

「うん。僕は博士と過ごしたいから。」

「おい、蘭。坊主だってクリスマスくらい親戚と居たいんだよ。」

「そうなの？コナン君。」

「うん？」

「分かったわ。じゃあ、楽しんできてね！」

「うん！」

そしてコナン君は『』と元気に言って部屋へ行ってし

まった。

そこで、フと思った。

「コナン君のサンタさんのプレゼント、どうしよう…。」

すると、小五郎が慌てたように言う。

「バツ、蘭！声がかいんだよ！子供の夢を潰すな…！」

「あ。ごめんなさい。で、どうしよう。お父さん。」

「俺も、坊主が何が欲しいかなんて知らねえよ。」

「コナン君ったら、何にも言ってくれないんだもん。」

（明日聞いてみようかな…。）

*

24日

「いってきまーす！」

「いってらっしゃい、コナン君。」

俺は体のわりに大きなリュックサックを背負って阿笠邸へと向かう。
現在午後一時。

ちなみに、灰原と俺以外の少年探偵団は今年のクリスマスは家族で
過ごすことになっている。

色々と考えているうちに、俺は何時の間にか阿笠邸の前に居た。

『ピンポン ピンポン』

俺がチャイムを鳴らした数秒後にドアが開いた。

「いらっしやい。新一君。」

「よお。博士。」

中に入ってソファに座る。

すると、博士が珈琲を淹れてくれた。

「そういえば、蘭君から『コナン君に』とクリスマスプレゼントを預かってるんじゃないか、見てみるか?」

「ああ。」

博士はテーブルの引き出しからプレゼントの包みを出した。

「これじゃよ。本当は新一君が寝ている間に枕元に置いておくように言われとつたんじゃないか。そんなことしたら新一君が怒ると思つて……。」

渡された包みの中には仮面ヤイバーの漫画が……。

俺は苦笑した。

この前『サンタさんに何を頼むの?』と聞かれた時に『仮面ヤイバーの漫画が欲しい』と言ったのは確かだが、まさか本当にそれにしたとは……。

「サンキュー、博士。そういえば灰原は地下室か?」

「いや、哀君なら今は有希子君とシヨッピング中じゃよ。」

「あいつがシヨッピングなんて珍しいな……。——………つてか、なんで母さんとなんだよ?」

「そりゃあ、哀君もシヨッピングに新一君を連れて行ってもつまらないじゃろうからのう。」

「そうじゃなくて? 何で俺に母さんが帰って来てること、教えてくれなかったんだよ?」

「はて……? 有希子君から聞いてなかったのかの? ワシはてつきり新

「一君には有希子君から言ってるかと思ってる言わなかったのじゃが……。」

「聞いてないよ！」

「そうじゃったのか。すまなかつたのう。」

「まあ、別にいいけど……。」

（つつーか、何で母さんも俺に言ってくれなかつたんだよ……。）

とりあえず俺は、ココに来る前に工藤邸に寄って取ってきた推理小説数冊をソファの前のテーブルに置いて、その内の一冊を手に取り開いた。

最近はまだ工藤邸に行っていないかったため、数日ぶりの推理小説だ。

毛利探偵事務所では推理小説なんかを読んでいると蘭たちに怪しまれてしまったため、読むことができないのだ。

「ただいまあ〜！」

「ただいま。」

「おかえり。哀君、有希子君。」

灰原と母さんが沢山の買い物袋を持って帰ってきた。

そして、母さんはリビングに入ってくるなり『新ちゃん？』と俺に抱きついてきた。

灰原は呆れた表情でそれを見ながら『あら、工藤君。もう来てたのね。』と言って、洋服のブランドの名前が書いてある紙袋数個持って、さっさと地下室に下りてしまった。

「ってゆーか、何で来てた事俺に言わなかつたんだよ？」

「あら〜いいじゃない。だって、新ちゃんを驚かせたかつたんだもん！」

母さんは俺の頭に顎を乗せて言う。
若干痛い。

「あのなあ……」

「いいじゃない、気にしない気にしない？」
相変わらずのハイテンションに付き合うのも、もうそろそろ疲れてきた。

すると、灰原が地下室から上がってきた。
白衣を着ている。

彼女は無言で俺の目の前まで歩いてきた。
片手を腰にあて、もう片方の手でポケットからなにやら一つの錠剤の入った瓶を取り出した。
瓶の蓋のシールにはこう書いてある。

『アポトキシン4869 解毒剤 No.11』

「これ、なんだか分かる？」

『これ』と、灰原は俺の目の高さで瓶を振った。
カランカランと音がした。

「な、何でしょう？」

「分かっているでしょう？殺されたいの？」

灰原の目が『殺す』と言っている。

「あ、いや……。分かってるよ。冗談だつて。……解毒剤だよな？」
「ええ。そうよ。今日これを使って、彼女に会いに行つてあげなさい。」

「は？なんでだよ？」

「何でつて、それが普通でしょ？貴方何言ってるの？彼女は工藤君とクリスマスを過ごしたいと絶対思ってるはずよ？」

「はあ？わけわかんねえ。」

「わけ分からないのは貴方の方よ。だいたい、何でそんなに怒ってるのよ。彼女の気持ちがあつてないのは貴方でしょ？」

「別に怒ってなんかねえよ。ただ、俺は蘭と居るよりココに居る方が楽だし。俺は母さんが帰って来てるし、蘭は蘭で徐々に家族三人揃って楽しくやってんだよ。」

「……。そう……。でも、一応これは渡しておくわ。持続時間は24時間。彼女に会いたくなったら飲みなさい。」

そう言つて灰原は地下室の方に歩きながら俺に瓶を投げた。余りに急だったため、一瞬落としそうになった。

「おう。サンキュー。」

「ただし、飲まなかったら明日帰る時に返してもらつから。」
「分かった。」

俺が言い終わつた頃には灰原はもう壁の向こうだった。

俺はもう一度瓶を自分の目の高さで振つた。

瓶の内壁に一粒の解毒剤が当たつて乾いた音をたてている。

「それで？新ちゃん、飲むの？飲まないの？」

「っつーかさー、もうそろそろ離してくんねーかな……。灰原は真剣に話してたのに、聞く方がこの体勢じゃ恥ずかしかったよ……。」

「あつ？あぁ……。ゴメンゴメン！哀ちゃんと新ちゃんが話してる時も私、新ちゃんに抱きつきっぱなしだったもんね？」

ようやく俺は母さんから解放された。

(ふう……。)

「新一君、もうそろそろ買い物に行つて来てくれんかのお。」

と、リストなびっしり書いてあるメモを渡された。

「なんでだよ？つてか、さっき母さんたちが買い物行つてたんじゃないのか？」

「しょうがないじゃない、新ちゃん。私たち、沢山物買ったからもうそれ以上持てなかつたのよ……。」

「ハア……。」

「んじゃ、よろしくね〜ん？」
「わあったよ。」

そこらへんに置いてあったコートを羽織り、財布を持って外に出る。

「うわっ、寒っ！」

幾ら日が出ているとはいえ、必ずしも暖かいわけでは無い。

「マフラー、してくればよかったな…。」

日が落ちてこれ以上寒くなるのはごめんだだったので、俺は走ってスパーまで行った。

一方、阿笠邸では…。

あ、熱い。

身体が…骨が…溶けていくようだわ…。

……っ！

「うわああーっ？」

すると、有希子が地下室のドアを叩いた。

『志保ちゃん！志保ちゃん？大丈夫なの？』

大丈夫よ。

そう言いたかったが、私はそのまま気を失ってしまった。

10分くらい経っただろうか。

私はブランドの紙袋に入っていた洋服を着て、リビングに上がった。

すると、そこに居たのは…。
「？」

丁度その頃俺は急いで買い物が終わらせ、両手に大きな袋を持ち阿笠邸へと歩いていった。

それにしても、多過ぎではないか。
こんなに荷物が多いなら灰原も連れて来れば良かった。

そんな事を考えながら阿笠邸のドアを開く。

「ただいまあ？」

「おかえり、コナンちゃん？」

何だか上機嫌だ。

何かいい事でもあったのだろうか。
それに、急に俺のことを『コナンちゃん』と呼ぶなんて、誰か来ているのだろうか。

しかし、そこにはあまり触れずに

「子供に持たせるに重過ぎなんだよ。」

そう愚痴を言いながら袋を母さんに渡す。

そしてリビングに行く…

そこには思いも寄らない人物が…

「み、宮野…？…と…怪盗キッド…？」

すると、宮野は『これが普通』とでも言う様な表情で
「お帰りなさい。早かったわね。」
とか言い出すもんだから、もう完全に頭が混乱してしまった。

「よお、名探偵。」

と言いながらキッドが俺に近づいて来た。

更に、『ボン!』と音と共に白い煙が…

視界が晴れてきたころには工藤新一の姿をしたキッドが

「こんばんは。工藤新一です。」

なあって冗談半分で笑やがる。

何処から持って来たんだか、俺の私服を着ている。

「江戸川君、いつまでそこでボーツと突っ立っているのかしら。いい加減にコートを脱いだらどうなの？」

その言葉で俺はハツと我に返った。

(つつか、灰原まで俺のこと『江戸川君』って…)

「はっ、ははっ。そうだよな。」

まだまだ状況が理解できないまま俺はとりあえずコートを脱いだ。

「それじゃ、私は夕食を作ってくるから。貴方は怪盗さんの話し相手でもしてあげて。」

(…して…あげて…って…)

俺は若干苦笑した。

宮野はソファの背もたれにかかっていたエプロンを取って、スーパーの袋を持っている母さんと一緒にキッチンの方へ消えていった。

まずここで俺は心を落ちつかせるために深呼吸をする。

そこで、今俺が疑問に思っている事が大きく分けて二つある。

一つは、今何故灰原が宮野になっっているのか。

もう一つは、今何故キッドがココにいるのか。

とにかく、今はキッドが目の前に居るのでキッドに対しての質問をする。

「……………。キッド……………」

「ん？どうした、名探偵。」

「なんでおめえがココに居るんだ…？」

ソファに堂々と座っているキッドは足を組み替える。

「なんでって…、いいじゃねえかよ。俺だってクリスマスくらい楽しみてえよ。」

「ん？いやいやいや、答えになつてねえし。」

「とにかく、いいだろお？別に。ちよつと覗いたらよく名探偵と一緒にいるじいさんとすんげえ美人な人が居たから。」

「そのおめえの見た美人って、もしかしてあつちか？」
母さんの方を指差す。

「ん、まあそーだけど、今は緋色の髪のお嬢さんの方が美人だと思ってる。」

「お嬢さんというか、女王様だよ……………」

俺もキッドも苦笑しながら頷く。

「それで？どーやって入ったんだよ。俺が見た限り、ガラスは割れてねえな。」

「そんなめんどくせえ事しねえよ。(それに、物を盗むわけでもないのにそんなド派手な真似しねーし。)普通に入れてもらった。」

「はあ？わけ分かんねえ。」

「だから、普通にピンポン押して『クリスマス、ご一緒させて下さい。』って言ったなら『あら、いいわよ！いらっしやい。』って。それで入れてもらった。」

(マジかよ……………)

博士もこちらを見て言う。

「まあまあコナン君。人数は多い方が楽しいしなの。」

「あ、いや、そうだけど……………っつーか招く人間違ってるだろ？」

「まあまあコナンちゃん、そうカッコしないの！」

「…ハア。」

流石にここまでくると言い返す言葉もない。

それから三十分程俺はキッドと話し込んだ。

お互いの正体に触れないように。

まあ、キッドは俺と宮野の正体には気づいてると思うが。

「江戸川君、テーブル拭いといて。」

突然言われたかと思うと、キッチンの方から台拭きが飛んできた。

俺はそれをキャッチする。

絞られたままの形の台拭きをきれいに畳んで仕方なくテーブルを拭く。

すると、宮野が次々と豪華な料理を運んでくる。

チキンからスイーツまで様々だ。

まるでホテルのバイキングのようで。

「す、すんげえ……?」「」

俺とキッドはその料理に圧倒された。

キッドは何時の間にか工藤新一の変装を解いて、上はワイシャツのみになってる。

ネクタイも外している。

ただ、シルクハットとモノクルは付けたままなので顔は上手く見えない。

(全体的に衣装のバランスおかしいだろ。)

そうツツコミを入れたかったが、やめておいた。

*

「さてさて…。全員揃ったところで…。メリークリスマス???せいのっ」

『パン』

母さんの掛け声に合わせて全員でクラッカーを鳴らす。

そして、何故か俺が後始末。

「コナンちゃんも志保ちゃんもキッドさんも博士も、いっぱい食べてね!」

それに対して真っ先に返事をしたのがキッド。

「はい。いただきます!」

「あら、いいお返事?」

元気だなあ、なんて思う。

とりあえず、隣に座っている宮野にさっきから気になっている事を聞く。

「おい、宮野…。」

「何かしら?」

「おめえ、何で宮野に戻ってるんだ?」

「あら、分からない?クリスマスだからこれのためよ。」

宮野はワイングラスを揺らす。

「ああ、なるほどな。じゃあ俺も戻ろうかな…。」

「まあ、戻るのは貴方の勝手だけど、今はキッドもいるし…。それに、貴方は戻ってもギリギリ未成年者だから呑めないわよ。」

「ハッ…。まあ、いいや。戻るよ。この中で子供1人で居るのは嫌だしね。多分、キッドも俺と宮野の正体は知ってると思うよ。」

「あら、そう。じゃ、いつてらっしやい。」

「おう。」

俺はそう言っただけで席を立った。

そして、元々阿笠邸にあった洋服を持って脱衣所に入る。

*

20分くらいすると工藤君が戻ってきた。

博士とキッドと有希子さんは急に現れた工藤君に驚いている。

「し、新ちゃん…。」

「母さん、久しぶり。そして怪盗キッド。始めまして、だな。」

「…フツ。そうですね。その姿では。」

『その姿では。』の言葉に反応したのが博士。

「ど、どういふことじゃ？新一君。」

「ああ、多分キッドは俺の正体、知ってるんだ。なあ？そーだろ？キッド。」

「まあ、そうですね。」

「やっぱりな…。じゃ、宮野は？」

「知ってますよ。灰原さんでしょう？」

「ええ。そうよ、よろしく。」

「こちらこそ。お嬢さん。」

そう言つて、キッドは私の手の甲に口づけをした。

こんなことをされたのは初めてで、少し胸がくすぐったかった。

「おい、キッド！宮野に何してんだよ！早く手え離せ？」

何故か工藤君は必死だ。

すると怪盗さんは私の耳元でこう囁いた。

「名探偵はきつと貴方のことが好きなのですね。」

「なっ…何を…。」

いきなり変な事を言い出すから驚いた。

（何を言ってるの…。工藤君はずっと蘭さん一筋よ。）

「まあ、見ればわかりますよ。さっきから名探偵はお嬢さんのこと、

チラチラ見えますよ？」

「そんなことないわ。」

「何故そう思うのですか？」

「工藤君には蘭さんがいるもの。私なんか気が向くわけないわ。」

「人の気持ちは代わるものですよ。」

「工藤君は代わらないわ。」

「……2人でそこら辺を少し歩きますか？」

「いえ、断わるわ。私は誰にも顔を見られてはいけないの。」

「そんなこと言わずに……。帽子を深く被れば大丈夫ですよ。」

すると、キッドは何処から持って来たのか、私にニットの罅のある帽子を深く被せた。

そして私の手を引いて玄関に向かう。

「お、おい！キッド！宮野を何処に連れて行く気だ？宮野は誰にも顔を見られちゃいけないんだぞ？」

リビングで工藤君がソファから腰を浮かせて叫んでいる。

「ちよつとお嬢さんは借りますよ。」

キッドがそう言うのと、私たちは12月の夜の外に出た。

私はコートも何も着ないままキッドに手を引かれて出てきたため、今すぐにでも家に戻りたい程寒かった。

しかし、こうしている間にキッドは歩きだした。

キッドもキッドで、ワイシャツ一枚だ。

まあ、家を出る時にマントなど、彼の物は持って来ていたが。

「うっつ、寒みい。」

「今更何を言っているの……。貴方が勝手に連れてきたんでしょ？」

「まあまあ、そう怒らずにさあ。」

『ボン』

白い煙と共に現れた、工藤君そっくりの少年。

彼は暖かそうなダウンジャケットを着ている。

「ほら、寒いだろ？」

そう言つて彼はそのダウンジャケットを私の肩に掛ける。
とても暖かい。

私は袖を通す。

彼のダウンジャケットは少しサイズが大きくて、私の手はすっぽり
隠れてしまった。

ダウンジャケットを脱いだ彼は、ジーンズに分厚いセーターを着て
いた。

「どう？あつたかいだろ？」

「ええ。」

「そつか。良かった。」

「それが貴方の『素』なのね？」

「ああ。そうだよ。俺、黒羽快斗。19だ。よろしくな。」

「よろしく。」

色々と話しながらある程度歩いていくと、小さな公園があつた。

私たちはその公園のベンチに座つた。

それから私たちは空を眺めたり話したりした。

とても楽しかつた。

彼は時々冗談を言つてくれたりして、私を笑わせてくれた。

しばらくすると遠くに工藤君が見えた。

「宮野〜！」

と叫んで、大きく手を振っている。

黒羽君は『ヤベツ』と言つて再び怪盗キッドに戻つた。

すると突然視界が真っ暗になった。

状況を理解するのに数秒かかつた。

私は今、キッドに抱きしめられているのだ。

「どういつつもり？」

抵抗するが、やはり彼の方が力が強い。

「ちよつと名探偵で遊んでみようと思ひましてね……。」

「？」

「私の顔を見て下さい。」

「え？」

私は顔を上げる。

キッドの顔は目の前にあった。

「こう？」

「そうです。そのまま……。」

彼の顔が近づいてきた。

私は思わず顔を背けた。

するとキッドは私の耳元でこう囁いた。

「大丈夫です。何もしません。ただ、名探偵から見て私と貴方が口づけを交わしている様に見えれば満足です。言ったでしょう？私は名探偵で遊んでいるのですよ。」

「そう……。面白いじゃない。」

私はキッドに顔を思いつきり近づけてやった。

「これでどう？」

彼の顔は少々赤くなっている。

「え、ええ。では、そのまま……。」

キッドは私の両手を片手で掴み、もう片方の手を私の腰に回した。

今私はキッドに『無理やりキスをされている』体勢なのだ。

「こんな体勢になったら、名探偵は怒って貴方の元に駆けつけるでしょうね。」

「あら、私も遊ばれているのかしら？」

キッドは笑って誤魔化した。きつとそうなのだろう。

「おい。」

キッドの肩に工藤君の手が置かれた。

それに対してキッドが振り向く。

「何ですか？」

彼は私の両手を離れた。腰にあててある手はそのまま。

「てめえ、宮野に何した…。」
「何って、なにもしてませんが…？ただ楽しく話をさせて頂いただけですよ。」
「嘘つけ。宮野…そうなのか？」
「さあ…？」

その瞬間…

工藤君がキッドに殴り掛かった。

しかし、彼はそれを綺麗に避けた。

「いやはや…。君がそんなに怒っていたなんて思ってませんでしたよ。」

「つたりめーだ。宮野に何かしたら俺が許さねえ。宮野は俺が守るんだ。」

「私はお嬢さんを取って食ったりしませんよ。」

「それくらい分かってる。」

「じゃあ、名探偵は彼女を何から守るのですか？」

「……。」

すると、キッドは私に言う。

「お嬢さん、少しの間、私たちの声の聞こえない所に居てもらえませんか？」

「嫌だ、って言ったら？」

「それは、困ります。」

「分かったわ。」

「ありがとうございます。」

「話が終わったら呼んでちょうだい。」

「分かりました。」

正直、困った。

何処に居ればいいのか分からないから。

取り合えずブランコに座った。

空には満天の星が。

それを背景に自分の白い息も何だか綺麗で。

フと2人の方を見ると、2人とも何故か真剣な顔をして話している。

ここは静かな住宅地の一角で。

所々の家がイルミネーションで綺麗に飾られていて。

「静かなクリスマスイブも悪くないわね。」

組織に居た頃には『クリスマス』なんてもの関係無かつたし、知らなかった。

だから、クリスマスは毎年博士が盛大に祝ってくれていた。

『朝起きると、枕元にサンタクロースが届けてくれたプレゼントが置いてあるんだよ！いい子にしてないとプレゼント貰えないんだって。だから歩美しい子にしてるんだあ。哀ちゃんは知らないの？“

クリスマス”』

よしださんの話によると、サンタクロースは赤い服を着ていてトナカイの引く空飛ぶソリに乗って来るらしい。

そんなの信じない。

信じられない。

サンタクロースなんてそんなもの、存在しないのだ。

プレゼントが自然と枕元に現れるなんて、あり得ない。

植物じゃあるまいし。

きつと親か誰かがこっそり置いているのだろう。

『いい子にしてないとプレゼントが貰えない』というのも、『いい子にしてなさい』って言う脅しなのだろうか。

神様と同じで、信じる者が勝手に信じているだけ。

本当はそんなの居るわけないのに。

不意に暖かいものに包まれた。

直ぐに誰だか分かった。

袖が白くなかったから。

「工藤君……。キッドは？」

「帰った。」

何故か抵抗する気にも、怒る気にもなれなかった。

すると工藤君は私を抱きしめる腕に力を入れた。

「どうしたの？」

「宮野……。良かった……。」

「……何がよ。」

「……いや、ただ、近くに居て欲しかった。」

「どうしたの……？急に。」

「近くに居て欲しかった。宮野が近くに居ないと不安になる。」

「今居るじゃない。」

「そうじゃなくて。だから……俺の隣に。」

工藤君は少し紅くなっている。

「だから、居るじゃない。相棒としてでも。」

「相棒じゃもの足りないと言ったら？」

「貴方の言ってること、よく分からないんだけど。」

「……近くに居て欲しいんだよ。」

「……………恋人として。」

「そう。」

そう言っ て私は立っ て工藤君の方を向いた。

そして、彼の頬にキスをした。

何故こんなことをしたのか分からない。

きっ と、来る前に飲んで いたワインで酔っ たのだろう。

「これが、私から工藤君へのクリスマスプレゼント。」

彼はしばらく顔が真っ赤なまま突っ立っ ていたが、こっ言っ た。

「じゃあ、俺からも。」

そして、彼の顔が近づい てきて、唇に何か が触れたのが分かった。

彼は、私を強 く抱き締めた。

そして、私はそのまま目を瞑っ た。

そんな素敵なクリスマス。

素敵な*****（後書き）

公園でのキッドと新一の話

キッドは宮野がブランコに座ったことを確認してからこう言った。

「名探偵、お嬢さんのこと好きなんだろ？ いいかげんに素直になりなよ。」

「…………。分かってる。好きだよ、宮野のことは。でも、あいつが目の前に居るとどうしたらいいのか分からなくなっちまって…………。」

（名探偵、ベタ惚れだな…………。）

「とにかく、早く言わないと俺が盗んじまうぞ。」

「…………ああ。言ってくるよ。」

「じゃ、俺は帰るから。」

「わかった。じゃあな。それから…………サンキュー。」

「おう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3529y/>

灰原 短編集

2011年12月11日14時50分発行